

研究課題：プレリキサホルの導入が自家末梢血幹細胞採取および移植に与える影響

研究の概要：2006年以來、新規薬剤と呼ばれるボルテゾミブ（ベルケイド）、サリドマイド（サレド）、レナリドミド（レブラミド）の登場により多発性骨髄腫の治療成績は向上しています。さらに、2015年にはポマリドミド（ポマリスト）、パノビノスタット（ファリーダック）が、2016年にはカルフィルゾミブ（カイプロリス）、エロツズマブ（エムプリシティ）が、そして2017年にはイキサゾミブ（ニンラーロ）が登場しました。一方で適応となる患者さんは限られますが自家末梢血幹細胞移植併用大量化学療法（自家移植）も高い奏効が期待できます。

自家末梢血幹細胞移植を行うためにはあらかじめご自身の幹細胞（造血の源になる細胞）を採取し、凍結保存しておく必要があります。しかし一部の患者さんでは、自家末梢血幹細胞の採取が困難なことがあり、この問題を克服する薬剤としてプレリキサホル（モゾビル®）が2017年2月に処方可能となりました。当院は全国でも有数の自家末梢血幹細胞移植実施施設であり、プレリキサホルを用いた自家末梢血幹細胞採取も積極的に行っています。

今回我々は、この薬剤の使い方や有用性を全国の施設にも知っていただくために、当院での自家末梢血幹細胞採取および移植の実施状況を解析して報告する研究を計画しました。

対象：2015年2月～2017年8月に自家末梢血幹細胞採取を行われた多発性骨髄腫の患者さん56名を対象としています。

研究の方法：診療録をもとに、患者さんの背景、採取された幹細胞の数、採取の日数、入院日数、移植後の生着までの日数などを解析します。

倫理的配慮：個人情報保護には十分な配慮を行った上で解析を行います。上記対象に該当すると思われる患者さんで、本研究への登録を希望されない方は下記までご連絡下さい。

日本赤十字社医療センター 血液内科  
研究責任医師：塚田 信弘  
TEL 03-3400-1311（代表）